大野龍浩

THE LIFE OF ELIZABETH GASKELL IN PHOTOGRAPHS

大阪：大阪教育図書、2012、7、000円、586頁。

多比羅真理子

大野氏が写真に造詣が深いことは、*Newsletter*に掲載されている日本ギヤスケル協会の例会、大会の様子を伝える写真、さらには、DVDで作成されたギヤスケルの生涯、“Gaskell Places in Photographs”などでよく知られている。

今回、その集大成ともいえる本書が上梓された。写真でたどるギヤスケルの生涯というタイトルが示すように、祖父母、両親の時代からギヤスケルが誕生したロンドン、チェルシーの家、そして、彼女が眠るナッツフィードのブルック・ストリート・チャペルまで、ギヤスケルに関連するイギリス国内の地を2000年から2007年まで、ほぼ毎年自らの足で訪れて撮った写真を収録されたのが本書である。掲載された地図39枚、そして写真が502枚というその数に圧倒される。

序で本書の目的が「ギヤスケルの生涯と作品を結びつけることにある」と述べられているように、本書はただ単にギヤスケルの生涯および関連した地を撮影し、収録した写真集とは異なっている。

最初に、本書内の引用文献の縮約形、家系図、関連する地の地図が載せられ、その後「①年、②月、③日、④ギヤスケルの年齢、⑤その事項が起きたときのギヤスケルの居住地、⑥手紙の受取人、⑦事項及び関連するギヤスケルの手紙、⑧引用、参考文献」が表形式で収録されている。加えて関連事項の説明のページには文末脚注をつけ、各事項に関連する写真番号と地図番号が記されている。⑦の説明の中で、ブロック体で書かれている地名は、写真が掲載されている印であり、その写真には、短いキャプションと撮影年月日が明記されている。

その一例をあげると、ギヤスケルが誕生した時の記述は、次のようになっている。① Year: 1810 ② Month: 9 ③ Day: 29 ④ Age: 0 ⑤ EG's Whereabouts: Lindsey Row, Chelsea, London ⑥ Addressee (無記入) ⑦ Events, or Contents of

Gaskell Letters : Elizabeth Cleghorn Stevenson is born at “Bell Vue,” Lindsey Row, Chelsea, (now, 93 Cheyne Walk, Chelsea), London. The baby had brown curly hair and blue eyes. Her mother was 40 ⑧ Sources Gérin, EG6; Uglow,EG4,12-13; Handley5) (本書 53 頁)。この地の写真は 10 枚にわたり、彼女の生誕の家の外観のみならず、周辺の景観がくまなく紹介されている。いずれの写真にも、行き交う人々の姿は見られず— 駐車している車があることで、その写真が現代のものであるということが気づかされるのであるが— まるで絵葉書のような美しい仕上がりである。『ルース』の重要な舞台となり、ギaskell自身さまざまな思い出のあるウェールズ、『従兄妹フィリス』のサンドルブリッジ、C. ブロンテの住んだハワース、ヒースの丘、『シルヴィアの恋人たち』の地ウィットピイなどの美しい景観が収められている。とりわけ、『妻たちと娘たち』に登場するタットン・パークの庭園やその館、また、ギaskellが晩年に求めたイングランド南部の村ホリボーンの家「ローン」は、現在居住する人がいることで内部を見ることがなかなか難しい状況にもかかわらず、今回写真で見られることは、読者にギaskellの作品の世界をより想像豊かに鑑賞する機会を与えるものとなっている。

1997年、大野氏は『シルヴィアの恋人たち』を翻訳、出版されている(彩流社)。当時ギaskellの作品は『メアリ・バートン』、『従兄妹フィリス』、『クランフォード』、「異父兄弟」などが翻訳されているだけで、その出版は画期的なものであった。その巻末に添えられた88頁にもわたるギaskell家の系図、年譜は大変読みやすく、後続のギaskell研究者たちにとって参考になるものであった。

今回の著書は、その資料を独立させ、同時に写真も掲載したことから、前作に比べると、その内容ははるかに充実している。中でも関連事項の欄にギaskell自身の手紙や、批評家たちの言及を多く載せることで、彼女の生涯をより客観性を持たせて語る役割を果たしている。このことは、大野氏がギaskellに関する多くの研究書を綿密に読み込まれていることを示している。さらに本書は英文で書かれているので、日本におけるギaskell研究の一端が世界に発信しやすいものとなっている点も評価されよう。

惜しいと思われる点は、家系図を2ページに収められているが、あまりに多くの親戚縁者、その職業まで書かれたことで、少々わかりづらいものとなっている

点である。その印字も小さなポイントでなので、読者の理解を深めるためにもう一工夫の余地があったのではないかと思った。

しかし、本書はギヤスケルの生涯と作品を従来の文字だけで語るのではなく、文字と写真で、加えて多くの彼女自身の手紙や批評家たちの言及箇所も表形式で伝えたところに大きな特徴がある。こうした方法は視覚的に、端的に表現しようとする現代の表現方法に相通じるものがあるのではないだろうか。

ギヤスケルの生涯と作品をたどる長い旅を続け、今回一冊の書にまとめられたことは、大野氏のギヤスケルによせる並々ならない熱い想い、情熱が十分に込められたものであることが読者にひしひしと伝わる著書となっているといえよう。

(実践女子大学非常勤講師)